説教20220724創世記18：20-33ルカ11：1-13「求めなさい、そうすれば与えられる」

先週も、「キリエ・エレイソン、主よ私を憐れんで下さい」という祈りの話になりましたが、今日も将に祈りのお話です。祈りとは、主イエスと私との応答ですので、主イエスと共に歩んでいる私たちは、四六時中、主イエスと応答しながら、祈りながらこの地を歩んでいるのです。今日、主イエスに「わたしたちにも祈りを教えてください」と言った弟子たちも同様でした。それで主イエスは弟子たちにいわゆる主の祈りを教えられたのです。そして、主の祈りの文言だけではなく、祈る時の、心構えや姿勢をも同時に教えてくださいました。祈る時の心構えや姿勢については、ルカ福音書の１１章５節以下に記されています。その中で、主イエスが言われていることの中から、今日は二つのことに注目してみていきたいと思います。先ず一番目は、８節に「しつように頼めば、」と言って、しつよう、しつこくという意味合いの言葉が記されていますが、このしつように、しつこく祈るということです。それは祈る時の心構えや姿勢において非常に重要です。たとえ願いがかなえられなくても、祈り続けること、諦めないで主イエスが言われたとおりに祈り続けることが大事であります。そして、二番目に、13節に「まして天の父は」と記されていて、主イエスは、この世の父親を引き合いに出して、この世の父親と天の父とを比較されています。又、８節には「友達だからということでは」と記されていて、主イエスは友達と天の父とを比較されているようです。つまり主イエスは、この世の親子関係や友達関係を引き合いに出して、父なる神と私という人間の関係が、親子関係や友達関係に勝っていることを明言されたのです。ですから祈る時は、父親や友人に対してではなく、天の父なる神に対して祈りなさいと主イエスは言われているのです。

さて、この二つの祈りの姿勢を私たちは守っているでしょうか。守っていますね。私たちは何としつこく「主の祈り」を祈り続けているでしょうか。この時主イエスが教えられて以来、世界中のクリスチャンが２０００年にもわたって、この主の祈りを、共同の祈りとして祈り続けているのですから、そのしつこさというのは半端がないことだと言えるでしょう。そして、私たちは、天の父なる神に対して祈っているでしょうか。これも私たちは守っています。常に私たちが祈る初めには「天の父なる神様」といって、その祈る相手を明言していますから。

但し、今日は、私たちは主イエスが「主の祈り」を教えられた初めに立ち返り、各自の祈りの姿勢を問い直してみるよい機会かもしれません。

先ず一番目です。私たちは本当にしつこく祈っているのでしょうか。しつこさがいつしかマンネリとなってしまっているということはないでしょうか。主の祈りは毎回同じ文言なので、つい心を尽くさずに、口先だけの祈りとなってしまうことがないとも言えません。しかし、心を尽くして祈ってみると、この祈りは本当に大変な祈りであります。「わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。」私たちは、今、この祈りを本当に心を込めて祈っているでしょうか。そのことを考えるのに真夜中にパンを探し求める友人の姿勢から学ぶことが出来ます。この友人は、将に今ここに必要な糧を求めていました。彼は、今ここにパンという糧が必要だったのです。どうしても、何が何でも必要だったのです。だから彼は「糧を与えて下さい」と祈りつつ、友達の家の戸を真夜中に叩き続けたのです。これは凄いことですね。祈りというのは、この様にしつこくしつこく祈ることで、知らない間に私たちはある行動へと導かれていくのです。冒頭に祈りとは主イエスと応答することだと申し上げましたが、私たちはしつこく主イエスと祈りの応答をする中で、主イエスのお応えを聞いて、為すべきことを知らされ、そうして一つの行動へと導かれていくのです。このしつこさの模範となるのが、今日の創世記でのアブラハムの祈りです。

創世記 18章 22節から

その人たちは、更にソドムの方へ向かったが、アブラハムはなお、主の御前にいた。

アブラハムは進み出て言った。「まことにあなたは、正しい者を悪い者と一緒に滅ぼされるのですか。

ここからアブラハムの主なる神に対する実にしつこい応答が始まります。アブラハムは主なる神にしつこく問いかけ、そして主なる神の答えを聞きます。アブラハムはこの様にしつこく主なる神と向き合っているのです。

このアブラハムの祈りの発端になったのは、この主が滅ぼそうとされているソドムの町に、アブラハムの親族のロトがいたということでした。アブラハムはロトをどうしても救い出したかったのです。だから、アブラハムはこんなにしつこく主なる神に執り成しの祈りをしているのです。

私たちは、主イエスとの応答の内に救われます。主イエスに問いかけ主イエスの声を聞いて、そのことで生きる指針を与えられ励まされて、又新たな一歩を踏み出すことが出来るのです。そして主イエスのお答えは、多くの場合、私たちがどうしようもない試練に立たされたとき、しつこく祈ることの内に聞かれることでしょう。

ですから私たちは本当に身につまされて「わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。」としつこく、今ここで必要な糧を、探し求めて祈る姿勢の大切さを主イエスは教えられています。

では２番目に私たちは、ほんとうに天の父なる神に対して祈っているか、ということについて考えてみましょう。主イエスは、私たちに祈りの初めに必ず、父よ、と言って天の父なる神に向かって祈ることの大切さを明記されました。私たちは、主イエスから「求めなさい、そうすれば与えられる」と言われていますが、それは父なる神に祈り求めるということで、決してこの世の実の父や、友達に対して求めるということを主イエスは勧められてはいないのです。祈りというのは、実の親や友達に対する願い事ではない、というのはまあ、当たり前であり、今更言われるまでもないことと多くの人は思われるかも知れません。しかし、主イエスが、今日、わざわざ実の親や友達を引き合いに出して、天の父なる神にこそ祈るべきであると明言されているのには、訳があるように思います。私たちは知らず知らずのうちに、しつこくしつこく天の父なる神に祈り求めることを止めてしまって、可能ならば、もっと簡単に実の父親や友達などに願い求める方を選んでしまうということではないでしょうか。主イエスはそんな私たち人間の性格をよくご存じなので、今日のような実の父親や友達を引き合いに出すお話をされたのでありましょう。

さて有名な讃美歌312番は祈りについて考える上で有益です。特に三番の歌詞を見てみましょう。

いつくしみ深き友なるイェスは　変わらぬ愛もて導きたもう　世の友我らを捨て去るときも　祈りに応えていたわりたまわん

この歌詞は、信仰を得て、まことに私にとって主イエスが友達となって下さらなければ、その意味を取り違えてしまうことでしょう。私も信仰を得る前に、この歌詞を聞いていて、なんだか随分薄情な歌だなあなどと思っていました。しかし実はこの歌詞は、世の友の薄情さを歌った歌ではなくて、むしろ世の友を主イエスが生かすのだということが分かります。私を絶対に捨て去らない唯一の友達はイエス様ただ一人です。それが私たちの信仰ですが、この信仰に生きる者は、友達関係において絶望することから救われます。たとえ、この世の友達全員から見捨てられたとしても、信仰に生きる人は絶望して自殺することは在りません。又、信仰によってイエス様のまことの友達とされた人は、その高められた愛、ギリシャ語ではアガペー、神の愛と言いますが、そのアガペーの愛を世の友における友達関係に持ち込むことが出来るようにされるでしょう。

この様に、私たち人間が出来るだけ幼いうちから、イエス様を友達として歩むことの大切さが知らされます。

主イエスは、真夜中に友達をもてなすために、これまた友達の家の戸を叩く友達の姿を描いています。主イエスはこれでもかというくらいこの世の友達の実像を引き合いに出して、そこに、父なる神へと向かう祈りが立ち現れる瞬間を描いているのです。

私たちは、この世の友達関係は何と美しく、喜ばしいことであるかと思いつつ過ごしていくうちに、いつしかその関係性が息苦しい縛り合うような、苦しみの関係へと変化してしまうことがあります。多くの場合それはこの世の友達関係の常識的な取り決めやお互いの契約によって保全を図るといった姿勢によることでしょう。でも、この真夜中に起こった出来事で、友達は、そのようなこの世の友達関係を危うくしかねない、破れに直面させられたのでした。でも、こういった、既存の安定が脅かされるような危機的状況の中で、その人が誰に対して祈るかが、実に大切になってきます。そんな時、友達に対してではなく、父なる神に対して祈り求めることの重要性を主イエスは語っておられます。

８節

「その人は、友達だからということでは起きて何か与えるようなことはなくても、しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう。

ここで頼む友達も、頼まれる友達も、それまでの友達関係の取り決めを忘れているといいますか、突き破っている訳です。ここに、世の友達関係が神の愛の方へと高められていうプロセスの実際が描かれています。

私たちの祈りの日々も、主イエスとの応答を重ねながら、実にこのような現実的なプロセスを経ながら、この世の友達が、神の愛の方へと少しづつ高められていくのだと言えるでしょう。そして、最も究極的な美しい御言葉でいえば、ヨハネ福音書 15章 13節

友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。という御言葉で言い表されることでしょう。

実にこの世の友達も父なる神から与えられた者です。ですからこの世の友達関係が、折に触れてこの世だけの契約関係を脱して、そこに祈ることが求められ、天の父なる神が介入してこられるという成り行きは当然であるともいえます。そして、この世の既存の友達関係に安住しがちな私たち人間の目から見れば、その時の祈りは理解不可能でただひたすら天の父なる神に祈り続けるということになります。でも、そこには必ず、私たちの思いをはるかに超えた父なる神からの応答が与えられます。

アブラハムは父なる神に対して次の様に祈りました。創世記/ 18章 25節

全世界を裁くお方は、正義を行われるべきではありませんか。」

アブラハムは、甥のロトをソドムから救い出すという個人的な目的を以って、主なる神に向かって執り成しの祈りをはじめました。しかし、全ての造り主である父なる神に対して祈るということは自ずから、全ての被造物を救ってくださいという執り成しの祈りとなります。

見てきましたように、主の祈りというのも、真夜中に祈られた全く身につまされる個人的な、父なる神への祈りであると同時に、主の教会で、声を合わせて祈られる共同の祈りでもあります。主の祈りを祈る個人は、それぞれの課題を抱えながら父なる神に対して祈るわけですが、それは、自ずから隣り人に対する執り成しの祈りともなっています。

その執り成しの祈りによって、私たちはこの世の友達関係をアガペーの愛へと少しづつ高められていくことでしょう。

主イエスは、この世に降ってこられ、私たちがしつこく祈ること、そして、アガペーの愛を求め得られるようにと、私たちに主の祈りを手ずから教えられました。その計り知れない恵みに感謝しつつ、又祈りの日々に歩みを進めて参りたいと願います。

祈ります

天の父よ

あなたは、御子イエスによって私たちに祈りを教えてくださいました。その恵みに感謝します。どうか私たちがいつもあなたに向かって祈り続けることが出来ますように私たちを守って下さい。

私たちが絶望にある時にこそ、祈りを聞いて下さり答えて下さる主よ、どうか私たちをみなしごにせず、あなたの慈しみの内にいつまでも生かされるものとして下さい。あなたの慈しみによって救われた私たちが、その慈しみによって、隣人たちのためにとりなし、祈っていくことが出来ますように。

暗闇に覆われているような、今の世の中にあって、私たちがあなたの光を求めて、戸を叩き続ける者とならしめてください。あなたに向かって祈り求め、聖霊に満たされて、よい行いへと導かれ、恵みと真理の果実を実らせて下さい。

父と聖霊と